

アダム・スミスにおける「富裕の自然的進歩」 についての若干の考察

武 内 哲 夫[※]

Tetsuo TAKEUCHI

Some Considerations of “the Natural Progress of Opulence” in Adam Smith

I. はじめに一スミスにおける市民社会

アダム・スミスの国富論は、市民社会がいかなる経済的な機構をもち、いかなる運動法則をもっているかという問題について始めての体系的な考察をおこない、富裕の自然的進歩 The Natural Progress of Opulence のための条件は果して何であるかを明らかにしたものと考えられている。スミスは、当時の支配的な経済学説であった重商主義理論の流通主義的な偏向に鋭い批判をむけ、その理論の批判的撰取の上に、重農主義学説の生みだした人間と自然との物的再生産過程を、価値論を基礎とする代謝過程として分析した。

そうしたことからわれわれは、ケネー、スミス、マルクスを市民社会＝資本主義社会を考察するための理論的な文脈として考えることができる。

もちろん、スミスの時代の経済は段階的にみて封建制の枠内から、いわゆる市民社会が自生してき、自らの再生産の自動的定置をとげてゆく過程にあったわけであり、その理論をとおして生成期のいきいきした新興ブルジョアジーの主張が理論化され、彼らの実践的な役割を担っていたことも事実であろう。

しかしながらわれわれは、市民社会の経済分析をおこなってゆくための理論的な系譜であり環であるケネー、スミス、マルクスという三大理論を、単にその理論家が生きていた歴史段階の持つ拘束性や限界性といったことで解釈してしまうことができない。われわれは当然それらの理論を生みだした基礎的な経済構造に多大の関心を払いながらも、市民社会分析のための論理構成の、社会認識の学として振り返る必要があるのではないだろうか。^{*}

^{*}例えば経済の不均等発展や二重構造という極めて常識的な用語がある。日本資本主義の場合それは構造的なものと結びついて農工の不均等発展という鋭い姿をとっている。それについて、労働力市場をめぐる説明、あるいは資本集中機構が生みだしたものとする説明などの理論的解明が果たされつつあるが、こうした構造的な矛盾が日本資本主義の再生産構造にとって必然的に何を意味するものであるかについての整理は必ずしも明らかにされていない。容易な近代化路線が存在する所以でもであろう。こうした問題についても、市民社会分析の理論的初発

形態に立戻っての考察はまだ必要ではなからうか。

このような意味から、本稿はスミスの「国富論」において富裕の自然的進歩が何によって規定づけられているか、その基礎にある農業労働の生産労働としての位置はいかなるものであったかということの考察のためのいわば準備的草稿である。

はじめにまずスミスは市民社会をどのように規定づけたであろうか。彼の理論的对象は明らかに市民社会であるが、彼の云う市民社会という概念は必ずしもわれわれが今日考えている市民社会＝資本主義社会としてのそれではない。彼の場合、結論的にはまず資本の自由な運動を保証する私的土地所有の確認と、分業を成立せしめる stock の蓄積が前提されているなら、その社会は市民社会として位置づけられることになる。

すなわちスミスは市民社会を直接われわれの云う資本制概念すなわち封建制との対比の下に把握するのでなく、前市民社会との対比で把握していることを物語っている。彼は国富論草稿において「市民社会において、富者や権力者が野蛮な孤立した国においていかなる人が調達しうるよりもよく、生活の便宜品や必需品を供給されるということが、なにによるのかを説明することはそれほど困難ではない。いつでも自分自身の目的のために、多くの人の労働を指図しうる者が、自分自身の労働にたよっている者よりも、自分の必要とするあらゆるものを、よりよく調達できるということは、きわめて容易に想像しうることである。しかし労働者や農民が、同様に、よりよい供給をうけているということが、いかにして生ずるかは、おそらくそれほど容易に理解されない。文明社会においては、貧乏人は自ら調達するとともに支配階級の莫大な奢侈にたいしても、供給するのである……これと反対に野蛮人のあいだでは、各個人は、自分自身の勤労の全生産物を享受する……それ故、もしも経験が反対のことをしめさなかったならば、われわれは当然つぎのように、すなわち、かれらのあいだでは、すべての個人は、文明社会における下層階級の人々が所有しうるよりも、はるかに豊富な必需品、を有するにちがいないと考えたであろう⁽¹⁾」と述べ、このような問題意識から市民社会の分析をはじめめる。こうしたスミスにおける歴史観は後にも述べるように特殊段階的なものを、きわめて超歴史的なもので原理づける誤りとなつてあらわれてくるのであるが、とにかくスミスは市民社会を未開社会との対比の下で把握し、この引用のような疑問を出発点としながら、事実の問題として分配関係における不平等が市民社会には存在するにも拘らず、経験的に＜社会のすみずみにまでゆきわたる全般的な富裕＞があるのは何故であるかと尋ねる。かくしてスミスはその基礎を分業論にみだしてゆく。こうしたことからスミスの市民社会は、分業を基点とした生産力の発展が、私的土地所有の確認の上に＜富裕の社会＞として発展し、自らを未開社会と区別することとなる。

Ⅱ. 分業—都市と農村

まずスミスにおける分業の社会的側面としての農業と工業との間の分裂についてみてみよう。富裕の自然的進歩は歴史的にこの農工間分業を基礎にして展開される。従つてわれわれは、この社会的分業について、スミスは農業労働にどのような特異性を与えているかということがわれわれの主題になる。スミスはマルクスによって「富を生む活動のすべての限界性を放棄し、工業労働でも商業労働でも農業労働

でもないが、同時にそのいづれでもあるたゞの労働を〔富を生む労働として措定したが〕、これは彼の巨大な一進歩であった⁽²⁾』との評価をうけてはいるが、一般的労働の基礎としての、社会的分業と企業内のいわゆる労働分割としての分業とを明確に区別していないし、農工間分業を基軸として展開していく富裕の自然的進歩をめぐる、次にのべるようなスミスの前提があるのである。これについてマルクスは同一箇所「富を創造する活動の抽象的一般性ととも、（スミスによって—引用者）いまやわれわれはまた、富として規定される対象の一般性を、あるいはやはり労働一般であるが、しかし対象化された過去の労働としての労働一般をえたのである。この移行がいかに困難でありかく大きかったかは、アダム・スミス自身時々またも重農主義に逆戻りしているのをみれば明らかである」とのべている。

スミスは市民社会の即自的分業をまず都市と農村における商業＝市場分割として把握している。この場合都市とは彼が town あるいは city と呼ぶものを意味し、農村とは country と呼ぶものであり、当然都市の産業は製造業、手工業、商業であり農村のそれは農業である。

都市、農村それぞれの市場を基礎とする分業によって、都市内部にも分業が形成され、歴史が自然的進行をとげるなら、まず農業での余剰生産物の上に農工間分業が成立し、国内市場の形成がおこなわれる。この関係についてスミスは「国富論」第三編第一章〈富裕の自然的進歩について〉の冒頭で次のように述べている。「凡そ文明社会といわれるものゝ大規模な商業は都会の住民と田舎の住民との間におこなわれるそれである。それは、或は直接に、或は貨幣又は貨幣を代表する一種の紙幣の介在によって行なわれる粗生産物と製造品との交換である。田舎は都市に対して、生活の資料と製造業の材料を供給する。都会は田舎の住民に対して、その製造品の一部を返還してこの供給に酬いる。物質の再生産がなく、またありえない都会は、その富と生活資料とはすべてこれを田舎から獲得するものと云って差支えがない。が、吾々はこれを以て都会の利得は田舎の損失なりと考えてはならない。両者の利得は相互的であり互恵的であって、この場合においても他の場合同様、分業は分化した諸職業に従事するあらゆる人々にとって有利なのである。田舎の住民は自らその製造品を調達しようとすれば、そのため使わないであろうよりは遙かにヨリ少量の彼等自身の労働の生産物を以て製造品のヨリ多量⁽³⁾を都会から購入するのである。都会は田舎の剰余生産物即ち耕作者の生活資料以上乃至は以外の物に対して市場を供給し、そしてこゝでこそ田舎の住民は、その過剰生産物を彼等の必要とする他の物品と交換するのである。

都会の住民の数とその収入とが大きくなればなる程、それが田舎の住民に提供⁽⁴⁾する市場はヨリ大となる。そしてその市場が大きくなればなる程、それは多数の人々にとって常にヨリ有利である⁽⁵⁾」。このようにスミスは都市と農村の関係を「都会の住民と田舎の住民とは、お互に相互の使用人 servant⁽⁶⁾である」として、本来的な利害関係をそこに見出さない。

そして彼のこの調和思想の底には、経済が自然的成長をとげるためには、農村の開発が都市のそれに先んじておこなわれることによって、すなわち農村の剰余生産物を基礎におくことから出発して、はじめて可能になるとみる。その理由の第一に「生活は、事物の性質上⁽⁷⁾ in the nature of things 便宜や奢侈に先立つものであるから、前者を獲得するための産業は後者に奉仕するための産業にどうしても先行する⁽⁸⁾ be prior ということ。第二に、この「順序は人間の性質上 by the natural preference of man 農業を好むことにある⁽⁹⁾」とみる。この第一、第二の理由はいづれも、資本制的生産という歴史性とは無

関係であり、スミスにおける農業観の一定の自然法思想による断定を物語っている。こうした人間の性向は、両部門の利潤率が同一の場合、資本の管理の便宜と安全から、資本投下は農業にむけられるとスミスは述べる。そして第三に、すみやかな富裕の進行は、事物の自然的過程 the natural course of things を基礎としなくてはならない。かつ農業はヨリ生産的 the labour of farmers and country labourers is certainly more productive than ……である。従って可及的な富裕の達成は、農業の発展を基礎としなくてはならないとする。このような三つの理由を主としてあげて、スミスは富裕の自然的進行を考える。「事物の自然の順序」に従って、農業に資本投下がおこなわれ、そこからのヨリ多くの剰余生産物の形成を基礎にして、都市に工業が成立し、この相互的發展は国内市場の展開を加速化し、その上で国外市場が開ける。「要するに自然的順序は第一が農業、次が製造業、最後が外国貿易である」⁽⁶⁾、このようにスミスは富裕の自然的進行の段階を規定する。

しかし当為 Sollen としてのシェーマをこのように規定づけたからといっても 事実としての歴史は必ずしも一国資本主義がこのシェーマ通りの発達をとげているとは限らない。現実の工業は何らかの意味で農業との間に素材転換をおこなわなくてはならないが、その市場は国内農業をそれとして持つ場合もあれば、また国外農業をそれとして持つ場合もある。すなわちそれぞれの国、あるいはその発展段階の差に従って市場構造の差異があるわけであるが、この点について、スミスは第二編第三章において、遠距離商業を基礎として成立した工業と、粗雑な製造業からはじまり、その基礎の上に外国貿易にまで拡大するに至る「農業の子孫」 the offspring of agriculture としての工業を明確に区別し、その原因を農業生産力の上昇の結果得られる剰余生産物が土地所有者の手に入るか、或いは直接生産者の手に入るかに求めている。

後者の道を辿った新大陸とは対照的に、前者すなわちヨーロッパでは、広大な農地が少数の大土地所有者の手にあり、その下で直接生産者の労働は、奴隷労働 slave labour → 分益農 metayers → 農業者 farmers という展開をとげるのだが、分益農は「少しも投資をしない地主が必ず生産物の半分を得る」ことから改良への関心を示さないし、借地人による耕作も、その所有権が不安定でその支払う「地代は普通粗生産物の三分の一に達し、多くの場合、収穫における時々の変動とは無関係な確定的な地代」であるため農業改良の資本投下は極めて阻害されがちであったとみている。こうして本来、富裕の自然的発達のため基礎であるべき剰余生産物が、ヨーロッパでは地主の手に帰し不生産的消費にむけられたため、農村を基点にしての国内市場の展開は阻害されることになる。

このような国内市場の狭隘さの下で、資本蓄積は農村外でおこなわれざるをえなくなる。重商主義的な政策が出てくるゆえんは、むしろこの封建的土地所有の齟らした市場構造の型の中にある。

そしてスミスによれば、転倒した市場の型の場合も、自然的進行の農業→工業→外国貿易というシェーマとは逆に、外国貿易の帰結としての都市の stock の蓄積が市場拡大を通して大土地所有そのものを崩壊に導いてゆくとみる。第三編第四章〈都市の商業は如何に田舎の改良に貢献したか〉は、ヨーロッパでの一般的な道を辿ったときの都市による農村発展の考察である。

彼は外国貿易の帰結としての都会は次のような形で農村の改良に寄与するとみる。

第一に「都会はその地方の粗生産物に対して常設の大市場を提供して、地方の耕作と進歩的改良とを

鼓舞し………勤勉と改良との若干の刺激となった」第二に「都会の住民が得た富は、屢々売物に出ている土地を買うために使われた………商人は普通田舎の地主 country gentlemen となりたがるもので、またそうなれば多くの場合最善の改良家 the best of all improver となる」、というのは「商業という営業がおのづから商人のうちに作りあげるところの秩序をたて、経済を守り、注意を深くするという習慣は、彼を、利潤をあげ成功を収めつゝ、改良計画を遂行するのにヨリ適した人物たらしめる」からである。第三に、「商業と製造業とは、これまで隣人に対しては殆んど常に不断の戦争状態をつゞけ彼等の上長に対しては奴隸的従属の生活をしていた田舎の住民の間に、秩序と善政とを、そしてそれに伴って個人の自由と安全とを齎した⁽⁹⁾」からである。

このようにスミスは都市の発展が農村に及ぼす影響をみるのであるが、これは前述した自然的進行とどのような関係にあるのであろうか。反自然的な歴史の進行がそのままに発展の一つの道であるとして二つの型を対比したのか、あるいは、反自然的な——従って大土地所有による、重商主義政策による転倒した市場の型が、それ自体の成立を基点として農業の改良に寄与してゆくことを、資本の必然の道として、自然的なものへの迂回的な復帰とみているのか、スミスの国富論第三編第四章の論述からは明らかでないようである。「ヨーロッパの大部分を通じて都市の商業と製造業とが、田舎の改良と耕作の結果ではなく、その原因および縁由となった」が、それは「北アメリカ植民地の急速なる進歩に現われているような自然的順序に比較すれば緩慢にして不安定である⁽¹⁰⁾」ということはスミス自身の事物の自然的過程という言葉の多義性にその不明確さを求めなくてはならない。

Ⅲ．生産的労働と農業労働

かくしてスミスは市民社会が分業を出発点とした富裕の体系であるとみ、富裕の体系を生み出す自然的進行を市場の型による類別として把握した。そしてその中には前述のような曖昧さが存在するのであるが、スミスの自然的進歩のシェーマを支える要因の一つは、スミスの農業に対する、むしろ農業労働に対する一定の考察である。

「農業がヨリ生産的である」この言葉は何としてもスミスにおけるフィジオクラートの影響のなみなみならぬものがあることを直観させる。フィジオクラートの思想的残渣の上にスミスの農工分割が生れ、かつスミス流の統一見解が形づくられる。その意味で、スミスは一体農業労働についてどのような見解をもっていたかについて、迂回的だが主として生産的労働の概念を通して考慮してみよう。

スミスは国富論第四編第九章においてフィジオクラートを「農業主義 System of Agriculture すなわち土地の生産物を各国の収入および富の唯一のまたは主要源泉とする経済学説」と規定し、「諺にいう、まげすぎた竿は、反対の方に同じくらいまげなければ、なおらないと。農業が各人の収入および富の唯一の源泉であるという学説を提唱するフランスの哲学者たちは、この有名な格言を採用したかにみえる。すなわち、コルベール氏の方策においては都市の産業が農村のそれにくらべてたしかに過大評価されているのであるが、それと同じくらいかれらの学説では過少評価されているようである」とフィジオクラートをみている。しかしスミスは重農主義を重商主義に対する歴史の発展過程での反動としてみていたのではない。云うまでもないことであるが、彼が重農主義の理論の中にみいだしたものは、「諸国

民の富は貨幣という消費しえない富ではなくて、その社会の労働によって年々再生産され消費されうる財貨であるとしたこと、この年々の再生産を最大にすべき唯一の有効な方策は、完全な自由であるとしたことにおいて、この学説のおしえるところは、あらゆる点において、正当であり、また、寛大で自由である⁽⁶²⁾」ということなのであり、諸国民の富の源泉を、貨幣から、すなわち流通過程の問題から、生産過程の問題として把握し、そのための方策を重商主義の保護政策から、自由放任の政策へと展開させているところに、彼の重農主義についての基本的評価がある。

スミスはこのように重農学派を「これまでで発表されている真理にもっとも近いもの」と評価するのであるが、スミスは重農学派の、特にケネーの理論についての批判の中で、農業労働を生産的労働の中でどのように位置づけていたであろうか。

後で述べるようにスミスは、農業労働のみが生産的なのではないと云った。しかしスミスのそう云った観点に立ったとき農業労働はどのような位置をしめていたのか、富裕の自然的進歩の論理の出発点としての、農業が最も生産的であると云うとき、何がゆえにそう考えられたのか、ということケネー批判をとおして考察してみよう。

ケネーは、何にもまして「土地が富の唯一の源泉である⁽⁶³⁾」という命題をかゝげる。そして「土地が生産するものは、それ自体が、勤労の、または人間の労働のたまものである。それゆえに、土地が生産する富を生ぜしめる人間の勤労または労働を、手工業の製作にたづさわる勤労から区別しなくてはならない」とみる。このように土地という生産手段に拘束されつゝ、農業労働は、唯一の生産的労働として表現される。

このようなケネーの考えに対してスミスは、フィジオクラートの重大な誤りは、彼らが「工匠、製造業者および商人の階級をまったく不妊的で、不生産的であるとする点」と批判する。そして次の五点からそれを論証する。

第一に「この階級（製造業者および商人）は、それ自身の年々の消費物の価値を年々再生産し、且つ、少なくとも、それを維持し雇傭するところの stock または capital の存在を継続せしめることが承認されている。してみれば、この理由だけでも、不妊的又は不生産的という名称を使うことは、この階級に対して適當である。吾々は、ある結婚が一男一女とだけしかあげず、それによってただ父母を代置するだけであって人類の人口を増加することをせず、ただそれを従来のみ継続させるだけに止まる場合と雖も、それを不妊的又は不生産的とは呼ばない。まことに、農業者や農村労働者が彼等を維持し、且つ雇傭する資本を越えて、年々純生産物を、地主に対する自由地代を再生産することはたしかである。そして三人の子供をあげる結婚は二人の子供しかあげない結婚よりは生産的であることは確かであるから、農業者及び農村労働者が商人、工匠及び製造業者に比してヨリ生産的であることも亦確かである。しかしながら一方の階級がヨリ生産的であるからと云ってそのため他方を不妊的又は不生産的としなくてはならぬことは⁽⁶⁴⁾ない」。しかしこの批判において一方ではスミスのケネーからの大きな転換が意味されていると共に、逆にケネーのスミスへの大きな影響が物語られている。

第二に「工匠、製造業者や商人などを奴婢の同一のものとみるのは全く不当のように思われる⁽⁶⁵⁾」。何故なら、製造業者や商人の労働は奴婢の労働と違って、その労働を販売することの出来る商品に固定また

は実現するのであるから、「彼等がそれをした瞬間において普通は消えて失くなるサービス」とは区別しなくてはならない。この見解においてもスミスは使用価値の視点を前面にだして生産的という概念を把えようとし、重農学派とは強いつながりを持つ。

第三に「工匠、製造業者及び商人の労働が社会の実質的富を増加しないとは云えないようだ」⁽⁶⁶⁾。何故なら彼らが消費するところのものに相等しい価値を生産するだけであるとしても、なお彼らの生産物は存続するものであり、さらに彼らはその生活のために供給されるフオンドのなかから幾許かを貯蓄するかもしれないということ。

第四に「農業者や農村労働者はだからと云って、極端な節儉をしないでは、真実の収入を、彼等の社会の土地及び労働の年々の生産物を増すことができぬという点では、工匠や製造業者や商人やと異なるところはない」⁽⁶⁷⁾。すなわち、社会の富を増加させるための分業は、農業においてよりも製造業においての方が容易である。そして「工匠や製造業者や商人のは地主や耕作人に比し極端な節儉と貯蓄を好むものであるならば、その限りにおいて、彼らは彼らの社会内に使われる有用労働の量を増し、従ってまた、その社会の真実の収入、その社会の土地及び労働の年々の生産物を増加するより多くの可能性をもつものである」⁽⁶⁸⁾。

そして最後に、国の富がその国の産業活動によって生産される生活資料の量によるとしても「貿易及び製造業国の収入は……商業又は製造業のない国よりは、常に遙かにより大きいのである。けれど、貿易と製造業があれば、その国土の耕作状態の現状では提供しえないほど多量の生活資料を、年々その特定の国に、輸入することができるからである」⁽⁶⁹⁾。

永々と引用したが、このスミスのフィジオクラートの生産的労働論に対する批判は、何らフィジオクラートの持っていた生産的労働の実質的規定に対する批判になっていない。たゞ<生産的>という言葉はどう使用するかという定義のちがいでしかない。

マルクスが「アダム・スミスがこの種の労働（工匠、製造業者—筆者）を『生産的』と名付ける第一の理由は、フィジオクラートがこれを『不妊的』および『不生産的』と名付けているということである」⁽⁷⁰⁾と云ったのがまさしくそれをついている。

しかしここで、スミスにおけるフィジオクラートの地位を明らかにするため、ケネーが<事実上富を生産する労働が生産的である>とみたその実質規定まで考察を進めなくてはならない。

彼は「国民の富裕は貨幣の量に存するのではなく、取引される富の豊富と良価に存する」⁽⁷¹⁾のであり「豊富であっても無価値ならばそれは決して富ではない。高価であっても缺乏するならばそれは貧困である。高価を伴う豊富であって始めて富裕である」とみる。すなわち貨幣的富 *richesses pecunières* と実物的富 *richesses réelles* の統合体として生産物は商品＝富となる。

そしてこの規定に関して、更にケネーは、それをあらゆる富一般に与えるのではなくて、われわれの用語で云えば、使用価値と交換価値を有する労働の生産物であっても、純生産物 *produit net* を齎さない労働の生産物は、彼の「富」という概念から除外される。彼の富概念に妥当すると考えたものは、その売上価値が生産に要する費用と労働の価値を、超越したものを与えられていなくてはならない。

このようにケネーの生産的労働の規定は、富を単なる使用価値物や僕婢労働のような無形のサーヴィ

スと区別し、富の生産に関与する労働は、その価値が経費を超過する労働の生産物を<土地から生じさせる人々の労働>にのみ限定されることになる。

このケネーの剰余を生まぬ、ヨリ多くの生きた労働を添加しない労働という視点が、農業労働と工業労働を区別し、僕婢労働と工業労働を等しなみにみるという結果をもたらしたのである。

ケネーの規定からは、農業労働は明らかに実物的生産物を生み、かつそれは売上価値において貨幣的に実現され、そしてそれは自ら生産労働にたずさわらない地主に富を供給するのであるから、農業労働は、自らの消費する以上の富を生産することになる。その富は所得としてみた場合、それは農業に特有の地代所得に他ならない。それに対比して製造業においては、支配的な労働の形がごく個人的なもの、経営形態から云えばごく artisan 的であることから、地主に相当するような不労所得階級も存在せず、かつそうした不労所得階級によって収得される富の存在もなかった。

このような中からケネーの農業労働への評価は生れ、それ以外の労働を不妊的、不生産的と規定することになった。

しからばスミスは、このようなケネーの見解に対して、先述のような批判を提出するのであるが、彼は何を根拠にして、同じく生産的であるとして工業労働と農業労働を規定しつつも、ヨリ生産的であるとして農業労働をみたのであろうか。その点に関して、果してスミスはケネーの生産的労働論を正当に批判しているのであろうか。

彼は「国富論」第二編第五章<資本の種々の用途について>において、「⁽²³⁾農業者の資本は彼の僕婢及び彼の家畜を雇傭し、他の資本に比して年々の生産物にヨリ多くを加える」、なぜなら「同額の資本のうちでは農業者の資本程に多量の生産的労働を活動せしめるものはない。労働する僕婢は勿論、彼の役畜も亦生産的労働者である。また、農業においては、自然も人間と共に労働する。 in agriculture too nature labours along with man そしてその労働は、何等の費用も要しないものであるけれども、その生産物が価値をもつ点においては、最も経費のかゝる職工の生産物と異るところがない……そして労働も大いに重要ではあるが、仕事の大部分は、やはり自然そのものによってなされなければならないのである」⁽²⁴⁾と述べる。

ケネーが、人間の労働を欠いては土地は何の価値も持たない、と指摘したのに対して、スミスは「農業においては、自然も人間と共に労働する」と云い、「地代は人間の働きと認められる一切のものを差引き、または補填した後に残る自然の働き the work of nature ⁽²⁵⁾である」とし、人間労働と自然力とを全く等しなみにあつかう。家畜も僕婢も自然も生産的労働という概念の中に同一におしこめ擬人化する、そして生産的労働という概念を設定するに当たっての対極にあった僕婢労働までが農業に関する限り生産的であるとされる。

究極においてスミスのこの農業労働についての考察は、農業労働を特殊化した——それはそれなりに土地という生産手段の強い拘束という反映の下での——ケネーの見解を、同一方向に更におしよめたに過ぎないと云っても云いすぎではないであろう。

Ⅲ. 若干の結論

さてわれわれは、スミスが展開する生産的労働論における農業労働の位置を定めることによって、彼が富裕の自然的進歩の一要因と考えた農業労働についての考察がきわめて重農主義的の偏向をもっていることをみた。

しかしこのことはスミスの経済学にとってそれほど本質的なことでないと考えられるかもしれない。事実、生産的労働論においてスミスは、ケネーの純生産物＝地代に対して、それを地代＋利潤でおきかえ、市民社会発展の基礎を自由な商品交換を生みだす分業＝等価交換に求めたのであるから。すなわちケネーにおいては純生産物がうまれる自然的条件が土地に求められていたのに対して、スミスでは分業がその基礎でなくてはならなかった。また、「ケネーにおいてはたゞの（あらゆる社会に存在し、純生産物をうまないところの）農業労働に対して、資本家的農業の労働を、純生産物をうむものとして対立させることが問題であったのに対して、スミスにおいては、たゞの（個人的な）労働に対して、分業労働こそが、歴史的な、剰余生産物をうみだす労働の様式として定立されている⁽⁸⁾」のである。ケネーが、純生産物→地代→農業労働→生産的労働と考え、この純生産物が農業における資本に転化してゆくことに経済発展の基軸を求めたのに対し、スミスは剰余価値→地代＋利潤→生産的労働という表式でもって、分業によるより多くの有用労働の雇傭がより富裕への発展への、すなわち蓄積への基軸になると考えている。

だが、このスミスにおける富裕の自然的進歩、再生産の考察は、そのための前提としてのファンドがどのようにして形成されるかという点について、どれだけの大きさの剰余生産物が分業のための蓄積として、すなわちファンドとして存在するかという観点を出発点にしている。従って富裕の進歩を可及的に大きく速くするためには、剰余生産物の量と、それが生産的労働、すなわち分業労働を維持する割合が問題となる。この問題に関してはスミスにおいて「再生産の量的な観点はケネーからそのまゝひきつがれ⁽⁹⁾」ていることになる。

農業労働が優位である。この思想はスミスの中にケネー的残渣として、なお強いものがあると考えざるをえない。いな残渣というよりも、再生産論の量的観点を決定づけているものはこの農業労働優位の考えではないだろうか。

先にも触れたようにスミスには富裕の自然的な進歩と反自然的な進歩の区別が不明確である。ケネーがケネーの表式に従ったいわば自然法的な路線が実現されないとき再生産の条件が失なわれるとみているのに反して、スミスは自然法がそのまゝに実定法としてあらわれなくても社会の進歩はありうる。たゞ自然的進歩に比較して、その進度は緩慢であるとの見解をとっている。

こゝで農業労働についてスミスの自然的という言葉の持つ意味を考えてみよう。

スミスの自然法という言葉の内容は極めて複雑である。それは第一に、歴史的に必然であるという、われわれが自然必然として用いる用法、第二に、それは人間本来のものであるという主観的な人間の属性としての用法、第三に、当然かくあるべきもの、当為としての用法、それらが混在しながら用いられている。富裕の自然的進歩という点で農業についてみると、スミスが自然的進歩の条件として先にあげ

た三つの理由に従って、第一に、農業の発展の下でもたらされる余剰生産物を基礎にして、素朴な製造業が発達し、農業と製造業との分業＝市場の拡大の下で調和的な経済発展が順調に進むという、いわば後年レーニンが市場理論に表式化した必然的な法則性の洞察、第二に、人間は本来、本能的に農業に愛着ををみいだすものであり、農業は生活必需品の生産を営むのであり、それがすべてに優先するのだという考え、第三に重商主義的な保護政策に対してきびしい政策的対決をおこなうスミスが、ケネー的再生産の基礎に立ちかえて、新大陸とヨーロッパの経済発展の対比の上に、富裕の進歩のためには、かくあるべきものとして、農業における余剰をその基軸に求めた当為としてのそれが考えられる。

スミスの学説史的意義はこの第一の観点にあるのであろうが、しかし第二はさておき第三の観点がそこに混在し、論理的な支えになっていることに注意しなくてはなるまい。

このような自然的という概念に対する一定の顧慮の上に、前述してきたスミスの富裕の自然的進歩における農業労働の評価が成立してくる。

そしてスミスのこうした論述の実体的背景となっているもの、すなわち彼が農業者 Farmer と呼ぶものの、そして農業者の時代について。

十五世紀後半にはイギリスの農奴制は、すでに事実上消滅し、解放された農民のうちから Yoemanry = Farmer が生成し、十六世紀の後半にもなれば農民分解は更に進み、Farmer 上層の中には 100 エーカーを越える広い所有地を獲得したり、lease hold として広大な領主直営地を貸りるものもできてくる。こうした段階の中で「農業者の耕作する土地は、その経営が全く同等に優秀であっても、所有者の耕作するものに比してその改良はのろい、蓋し前者においては生産物の大部分が地代に消費されるからであり、もし農業者が所有者であったならば、土地の改良に一層多くそれ（生産物－引用者）を使うことができるからである」とみた Farmer の⁽³⁾すぐれて実践的な理解の上にスミスの所論は成立したと考えられる。

こうした Farmer の生成、発展とその胎内から産業資本を生みだしてゆく過程での、yoeman 的蓄積の上で理論が展開されているにも拘らず、すなわち農業の特殊な歴史的な形態を前提しているに拘らず、一定の自然法的な考えの下で超歴史的な原理構成をしたところに、農業労働に対する前述の評価が生れたのではないだろうか。

云いかえるならスミスにとっては、農業はこの一定の段階において、はじめて富裕の自然的進歩の基礎であると云えるのであり、そこになお重農学派的残渣が存在したと云えるのではないだろうか。

(未完)

註

- (1) アダム・スミス「国富論草稿」水田洋訳 p. 46
- (2) K. Marx, Kritik der Politischen öKonomie 宇高基輔訳 p. 352 A. Smith "Wealth of Nation" ed. Modern Library p. 356 大内兵衛訳 (2) p. 181 (以下それぞれ W. o. N. および邦訳と記す)
- (3)(4) W. o. N. p. 358 邦訳 (2) p. 185
- (5) 白杉庄一郎氏は「都市と農村との対立に関するアダム・スミスの見解」(経済論叢42巻1号)において対立は市民社会に即自的・本来的であると、スミスの見解を述べておられるが、本来的にスミスにはそうした対立はないと考えるべきであろう。
- (6) W. o. N. p. 357 邦訳 (2)p. 183

- (7) W. o. N. p. 357 邦訳 (2) p. 184
- (8) W. o. N. p. 360 邦訳 (2) p. 188
- (9) W. o. N. p. 384~385 邦訳 (2) p. 230~232
- (10) W. o. N. p. 392 邦訳 (2) p. 245
- (11) W. o. N. p. 628 邦訳 (3) p. 437
- (12) W. o. N. p. 642 邦訳 (3) p. 461
- (13) F. Quesnay, *Tableau economique* 増井, 戸田訳 p. 78
- (14) W. O. N. p. 639 邦訳 (3) p. 455
- (15) W. O. N. p. 639 邦訳 (3) p. 456
- (16) W. O. N. p. 639 邦訳 (3) p. 457
- (17) W. O. N. p. 640 邦訳 (3) p. 458
- (18) W. O. N. p. 641 邦訳 (3) p. 459
- (19) W. O. N. p. 641 邦訳 (3) p. 460
- (20) K. Marx, *Theorien über den Mehrwert* 長谷部訳 (1) p. 244
- (21) F. Quesnay, *Hommes* 坂田訳 p. 256
- (22) " Grain 島津, 菱山訳「ケネー著作集」第2巻 p. 125
- (23) W. O. N. p. 344 *marginary snmmery by Cannan* 邦訳 (2) p. 159
- (24) W. O. N. p. 344 邦訳 (2) p. 159~160
- (25) W. O. N. p. 345 邦訳 (2) p. 159~161
- (26) 内田義彦「経済学の生誕」 p. 308 なおわたしのスミスへの問題意識や考察は、この著者に負うところが極めて大きい。
- (27) 全 p. 328
- (28) W. O. N. p. 371 邦訳 p. 208